

世界を覆う厄災である魔王を仲間と共に長い冒険の末に討伐して、わたしはようやく日本へ帰れるようになった。

王宮の奥深くにある召喚の間。祭壇に囲まれた光の柱に歩みを進めようとして、わたしはつんのめる。誰かに袖を引かれたことに気が付いて振り返れば、苦楽を共にした仲間のひとりであるエリックさんがなにか言いたげな顔をしてこちらを見据えてきた。

「コトネよ。本当に帰ってしまうのか？」

「……エリックさん」

眉間に寄せられた皺に驚いてしまう。エリックさんはいつも冷静沈着だった。そして感情が顔に出づらく、決して冷たい人ではないのだが誤解されることが多かったように思う。わたしも最初は彼のことを誤解していた。淡々と魔法で魔物を屠っていく姿が恐ろしかったし、無口でなにを考えているのかわからなかったからだ。

けれど、いまは本当は優しい人だと思っている。

冒険に出て間もないころ、異世界で訳が分からないうちに魔王討伐の使命を背負わされて、それでも頑張るしかなかったわたしは、ある夜何も悲しくないのにポロポロと涙が止まらなくなった。日本が、そこにいる恋人と友達がひたすら恋しくなってしまった。

「……みんな、わたしのことを忘れてないかな」

寝袋から抜け出して何をするでもなく星を見ていたら、エリックさんが隣に腰を下ろしてきたのだった。おそらく魔物が襲ってこないか見回りにきたんだろう。

「どうした。故郷が恋しくなったのか」

ぶっくらばうに尋ねられた言葉が、まるで責めたてられているように聞こえて首を振る。

「ごまかさなくていい。戦すらない国から来た少女にこのような重みを背負わせる方がおかしいのだ」

いつも通りの淡々とした口調だったけれど、こちらを氣遣っているのがわかった。正直意外で、わたしは目を丸くする。

「……家に帰りたいのなら、帰してやれないこともない」

「え。で、でも王様は役目を果たすまで帰れないって」

「常であれば王の説明は間違っではない。こちらと異世界をつなぐには膨大な魔力が必要になる。しかし、こちらとあちらとの境目があいまいになる時期があるのだ。星の巡りによってな」

エリックさんの説明はよくわからなかった。ただこちらにも太陽と月に似た天体があって、それが重なることで魔力の乱れが起こるらしい。魔力が乱れるとあちらとこちらの境目があいまいになるから、大掛かりな儀式をしなくても帰れる可能性

があるそうなのだ。

「どうしてもというならば帰してやってもいい。どうせその程度の気概では魔王も倒せないだろう。無駄死することはない」

言葉は厳しいが、まったくその通りだと思う。

「……でも、そんなことしたらエリックさんは」

エリックさんはわたしの冒険についてきてくれているが、元々宮廷に仕える魔術師だった。そんな人が王命に逆らってよいはずがない。

「お前のような小娘がいらぬ心配をせずともよい。陛下には道半ばで倒れたとでも報告しておこう」

涼しい顔で告げられた言葉に、嘘だと思う。人や時間、資金を裂いて召喚した聖女を失ったとなれば、なんらかの処罰があるはずだ。それなのに、この人はわたしを逃がしてくれようとしている。使命から、この世界から。

「エリックさんって、やさしいんですね」

「……オレはただ、お前が去ればもつと肝の据わった聖女が召喚されるかと思っただけだ」

居心地がわるそうに焚火を見つめる顔を眺めていると、気が付くと嗚咽はおさまっていた。

けっきょくわたしは翌朝、仲間たちの目を盗んでエリックさんに耳打ちした。

「エリックさん、わたし帰りません。怖いけど、もうちょっと頑張ってみます」

エリックさんは驚いていたが力強く頷いてくれたのだ。

懐かしい記憶が呼び起こされて、帰りがたくなる。わたしがたじろいだのを察したのか、パーティーメンバーがエリックさんを囲んだ。

「おいエリック、コトネを困らせるなよ」

「お別れが辛いのはあなただけじゃないんだからね」

口々に他の仲間たちが口を挟んで、袖を握る力が緩む。

「……コトネ、これを受け取ってはくれないか」

懐からエリックさんが取り出したのは、華奢な金属の鎖で編まれたブレスレットだった。仲間たちがエリックさんとわたしの顔を凝視する。

もつと早くこれを受け取っていれば、この光の柱を通らずにこちらへ留まる決断をしたんだろうか。

「オレだと想ってつけてほしい。辛いことがあれば、すぐに迎えに行く」

「……うん、悲しいことがあったら絶対エリックさんのことを呼ぶね」

今生の別れだとわかっていても、彼の言葉に頷かずにはいられない。ブレスレットをその場でつけようとしたけれど、目がかすんで上手くつけられない。

「あれ、なんで……」

「貸してみろ」

エリックさんの骨ばった長い指がわたしの腕に触れる。ゆっくりと留め具をつけられて、腕にキラキラ光る細い鎖がまとわりついた。アメジストの双眸が、わたしを見つめる。吐息すら感じる距離に、わたしははじかれるように顔を背けた。

「っ、……エリックさん、みんな、元気でね」

ここにいたい気持ちを抑えながら、背を向ける。眩い光がわたしを包んで、ぐにやりと空間が歪んだ。

「うう……」

混濁していた意識がゆっくりと覚醒していく。白衣に身を包んだ女性がわたしを見て「あ」と小さく声を上げた。まだはつきりとしなない頭でカラダを起こそうとしたところ慌てて止められる。

「宮田さん、まだ起きちゃだめですよ。あなた、三年も寝たきりだったんですよ」  
宮田さん、と呼びかけられて一瞬誰のことかわからなかった。久しぶりに呼ばれた苗字に違和感を抱くほど長くあちらにいたんだと実感する。

医者を呼んでくると部屋を出て行った恰幅のいい看護師を見送りながらひとり  
でつぶやく。

「……夢だったのかな」

剣と魔法の世界。魔物が跋扈する世を救うために魔王を倒したなんてゲームみたいな話、現実とは到底思えない。でも、不器用なあの人やさしさも、仲間たちの



笑顔もたしかに胸の中に残っている。

ふと、腕にわずかに重みを感じて目の前にかざす。そこには先ほど受け取った華奢な鎖で編まれたブレスレットが確かに輝いていた。

「……やっぱり、夢じゃなかったんだ」

医者によると、わたしは交通事故で病院に運ばれてから三年ベッドの上で意識が戻らなかったらしい。わたしが再び目を開けたことに、医者と看護師は驚いているようだった。定期的にお見舞いに来てくれていた友達は、起き上がったわたしの姿を見て腰を抜かすほどに驚いていた。信じられないものを見たように驚いてから、顔をゆがめて手を取って「よかったねえ」と繰り返し返す。わたしも思わずもらい泣きしまった。

二人で声を上げてひとしきり泣いたあとに落ち着きを取り戻してから、ふとわた

しは三年間頭の片隅にあった顔を思い出した。

「そういえば、ケンジはどうしたの？」

付き合っていた恋人の名前を出すと、親友は気まずそうに視線を反らす。

「……まさか」

「あいつ、あんたのこと待ってられなくて、別の人と付き合ってるの。わたしは怒ったんだけど、でも、目を覚まさないかもっていわれてたからさ、止められなくて」

「そう、そうなんだ」

わたしはぎゅっとシーツを握りしめる。布に大きく皺が寄った。

「大変だと思うけど、困ったことがあったらなんでもいって」

涙ぐんで微笑んでくれる友人に、わたしは一瞬でも帰ってこなければよかったと頭に過ったことを恥じる。

「……ありがとう」

友人を安心させようと口角を無理やり上げたけれど、きちんと笑えているかはわからなかった。

異世界へ召喚されるまで、わたしは大学生だった。幼いころに両親と死に別れて親戚の家に置いてもらいながら必死に勉強して、大学進学と同時に世話になっていた親戚の家を出た。親戚はちゃんと面倒を見てくれたけれど、本当の家族と呼べるまでには心は通じ合わなかった。

でも良識のある人たちだったから、両親の遺産を使い込まずに大学進学と共にわたしに渡してくれた。入学して半年、サークルやバイトにも慣れてきて、彼氏もできた。好きな人と付き合ってこのまま結婚して家族を持つのかとなんとなく考えていた。見知らぬ世界に召喚されて必死に戦っていたら、知らず知らずのうちに三年も経ってしまっていた。わたしはまだ、まず大学に復学するところからまたはじめないといけない。

退院してから、親戚が事故の保険金から家賃を払い続けてくれていた自室へ戻る。はあと長い溜息をついた。

これからの苦難を想像して、あれだけ帰りがかった日本に戻ってきたことを後悔しそうになってしまう。気持ちを紛らわすためにテレビをつけてみたけれど、ガヤと楽しそうに騒ぐひな壇の芸能人たちのはしゃぎようがなんだか見ていられなくて画面を消した。

「……もう一度、聞きたいな」

眠れない夜に、エリックさんは母親から教わったという子守唄を歌ってくれた。そんなに子供じやないとむくれたけれど、その歌を聞いたときは不思議とよく眠れた。

どんな旋律だったかと思い出そうとしているうちに、わたしは意識を手放していた。

ぱちぱち、という焚火が爆ぜる音に顔を上げる。眠い目をこすりながら空を見れば、黒いローブを着た背中が見えた。夜空に輝く月に似た天体は、地球のものより青白い。旅の途中で、野営したときの夢を見ているのだと理解して、ゆっくりと身体を起こす。

「……エリックさん？」

「どうした、起きたのか」

「焚火で本を読んだら目が悪くならない？」

わたしがそう注意してもエリックさんはちらりとこちらを見て、また紙に視線を落とす。何度したかわからない他愛のないやり取りだ。断りもせず隣に腰を下ろすわたしに、やっぱりエリックさんは何もいわずに受け入れてくれる。

夢だとわかってるのに、嬉しくて頬がゆるんだ。

「オレなんかに懷いて、キミは物好きだな」

本に視線を落としたままエリックさんがつぶやく。

「だって、エリックさん優しいんだもの。わたしだけじゃなくて、よくみんなのことを注意深く見てくれているでしょ？」

「そうか」

大きな手が伸びてきて、ゆっくりとわたしの頭を撫でる。

「わ」

困惑しながら髪を梳くやさしい手つきにうっとりしていると、いつも真一文字に引き結ばれた唇が綻んだ。

「……オレもキミと一緒にいると、騒がしいはずなのにひどく落ち着く」

「っ、エリックさん」

わたしは思わず、エリックさんにカラダを預けてしまう。

「どうした。なにかつらいことでもあったのか？」

淡々とした、それでいてやさしさをにじませた声。あつという間に鼻がツン、と痛みます。自分でもこらえられずに涙があふれてしまった。

「あれ、わたし、泣き言うためにエリックさんに会いたいんじゃないのになあ……」

「辛いことがあればいつでも呼べといっただろう」

頬を撫でられて指の腹で涙を掬われる。そのあたたかさに思わず目を閉じれば、少しかさついたあたたかくて柔らかい感触がまなじりに押し当てられた。

「ん」

それが唇だと気付いて少し肩が震えたけれど、逃れようとはしなかった。むしろ自分からエリックさんの手を握っていた。

「どうした、ようやくあまえる気になったか？」

柔らかい声色で囁かれて、顔中に口付けを落とされる。まぶた。頬。鼻先。顎を

掬われて、エリックさんの顔がゆつくりと近づく。キスされちゃう、と気が付いたけれどももう拒む理由もなかった。

「ん……」

触れるだけのキスをされただけなのに、頬が熱く熱を持つ。元彼とはじめてこうしたとき、こんなにドキドキしたつけと振りかえってみるけれど、もう忘れてしまった。

「エリックさん、慰めてくれるの？」

「いやか？」

「……ううん、なぐさめてほしい。ぎゅってして」

ローブにすっぽりと覆われた、見た目よりもたくましいカラダに抱きしめられる。現実ではないのに、エリックさんのおいと体温がわたしを包んでいく。

「眠れそうか？」



相変わらずぶっきらぼうに尋ねてくるエリックさんの声に思わず笑ってしまう。お札をいわないといけないのに、瞼がとても重かった。うとうとと船を漕ぐわたしの背中を大きな手のひらがポンポンと叩く。

「エリック、さん」

「眠ってしまえ。おまえが眠るまでオレはここにいる」

当然のように見守る優しい眼差しに、わたしは安心して意識を手放してしまった。

「……ゆめ？」

カーテンから差し込む日の光に、わたしは慌てて辺りを見渡す。スマートフォン  
の液晶を見ると、まだ大学へ向かうには余裕がある時間だった。

「……もっと、エリックさんに抱きしめられていたかったな」

わたしがぼつりと呟くと、ブレスレットがチカリと光った気がする。つらいことが  
あったらいつでも呼べと言っていたエリックさんを思い出して、本当に彼が応えて  
くれたような気になって嬉しくなると同時に、どうしようもなく泣きたくなった。  
「やっぱりわたし、エリックさんのこと好きになってたんだなあ」

冒険の途中で、いつだって伝える機会があつたのにどうして伝えられなかったんだ  
ろう。へんな義理立てなんてせずに、素直になればよかった。

そんないまさうどうしようもないことを後悔しそうになって、ぺちりと軽く頬を叩  
いた。

「こんなんじゃないだめ。せっかく帰ってこれたんだから頑張らないと」

重い身体をベッドから起こして、洗面台へと向かった。

気の進まない自分を叱咤しながら、学務課へいき復学の手続きを申請する。訝し気にじろじろと見られたものだから、話さなくてもいい事情を思わず自分から明かしてしまった。交通事故にあつて数年意識を失っていたのだと説明しても、事務員からはなんのねぎらいの言葉もなかった。

思ったより時間がかかってしまつて、書類を受け取るだけだったのにどつと疲れってしまった。

「……大学も、ずいぶん変わったなあ」

キャンパスを歩きかう学生のファッションの流行一つとっても、自分が三年眠っていたのだと実感せざるを得なかった。よく恋人と座つて、たわいない話をしていた

広場にあるベンチは、記憶では真新しかったはずだ。そこに腰かけるとペンキがあちこち剥がれて、古びているのがよくわかる。

なんとなく腕に巻かれたブレスレットを弄びながら深い息を吐いていると、男女の仲睦まじげな声が聞こえてきた。その声に聞き覚えがあつて顔を上げると、見間違ひようもない元彼だった。付き合つたころにはもう少し誠実そうな雰囲気だったはずだけれど、いまはずいぶん遊び慣れていそうな風貌になっている。その隣の女もメイクや髪型が変わつているがわたしとサークルが同じだった女だ。彼らはわたしに気づかずに腕を組んで通り過ぎるところだった。

「あ」

思わず立ち上がってしまうと、二人はまるで幽霊でも見たかのように目を大きく開けて固まる。両者のあいだに沈黙が流れる。なんと切り出そうか迷っていると、男が一步私の方へ進み出た。

「コトネには悪いけど、もう過ぎたことだから。わかつてくれるだろ？」

頬を染めながら告白してきてくれたはずの男は、あまりにも冷淡だった。会えなかった時間の断絶を否応がなしに思い知らされる。

「過ぎたことって、こっちは三年も眠ってたんだよ？それなのに一方的に納得しろって、あんまりじゃ」

思わず睨み付ければ、友人だった女を庇うように後ろへと隠した。女の口角が持ち上がっているのを見て、頭がおかしくなりそうになる。まるでこちらを悪者にするような振る舞いに、怒りと悲しみが交ぜになって、胸が苦しくなる。

しばらくそこから動けないでいると、異様な雰囲気だと察した人々の視線がこちらとこちらに注がれている。

「あのさあ、みんな見てるよ？悪いけどもういいかな」

心底めんどくさそうに溜息を吐かれた瞬間に、無理やり鉛の玉を飲み込まされたよ

うに胸がずしりと重くなる。この世界に帰ってくる理由だと思っていた細い糸は、ずっと昔に切れていて、わたしだけがそれに気が付いていなかったんだとわかった。「……いいよ、もう」

納得したわけじゃない。けれどもう、どうでもよかった。

わたしが呟いた瞬間に、予鈴が鳴る。あれだけ集まっていた人々はそれを合図に蜘蛛の子を散らすようにいなくなった。わたしだけがずっと、その場に留まっていた。

ほとんど呆然自失の状態で、アパートの一室のドアノブをひねる。扉が締まった瞬間、その場にくずれ落ちた。

鞆もその場に落としてしまい、クリアファイルから書類が散らばっていく。せつかくもらってきたそれを足で踏みつけて、ふらつきながらベッドへ身を沈めた。

「うっ……、うわああん……」

子どもみたいに声を上げて、しゃくりあげて泣いてしまう。泣き喚いたところで、慰めてくれる人はもういない。

「……エリックさん、たすけて、おねがい、わたしのこと、むかえにきて」

叶うはずのない願いを口にしながら、手首に輝くブレスレットを見つめる。反応するはずもないそれを何度も撫でた。そうしているうちに、わたしはいつの間にか泣き疲れて眠ってしまった。

——コトネ。

混濁した意識のなかで、穏やかな声が聞こえる。

声のする方向に視線を向ければ、会いたいと願っていた人がいた。

「エリックさん」

「オレを呼んだだろう。……だから、会いに来た」

「ほんとう？うれしい」

わたしはあたりを見渡す。白磁の石の壁と、天蓋付きのベッド。そして本棚には  
軋みそうなほどに本が並んでいる。それだけでここが冒険の途中に留まった安宿で  
はないことはわかる。

夢なのにここがどこか気になってしまうわたしの思考を呼んだようにエリック  
さんが応えた。

「ここはオレの部屋だ。気に入っではいるが華がない。ここにキミがいればオレの



気持ちも休まるだろうがな」

エリックさんの言葉に苦笑する。いくら夢とはいえ、自分の願望を反映しすぎだ。うすうす両想いではないかと勘付いていたが、仮に恋仲になってもエリックさんが呼吸するように甘い言葉を囁くとは到底思えない。

「ふふ、エリックさんたら。それ、まるでプロポーズみたいだよ？」

「オレはそのつもりだ。あれほど帰りたかった故郷に戻れたというのに、キミはオレを欲しただろう」

アメジスト色をした双眸が、じいとわたしを見据える。にじり寄られてベッド際に追い詰められてしまう。いますぐにでもベッドへ押し倒されそうになって困惑している、エリックさんが低い声でわたしを呼んだ。

「コトネ」

エリックさんがわたしの髪を一房とる。たしかわたしは昔、故郷に恋人がいるか

らと彼をそれとなく拒んだのだった。

「拒まないのか」

そう問われて、わたしは目をぱちりと瞬かせた。夢とは思えないほど真剣な声色に、どう返事を返せばいいか戸惑ってしまう。でも、あのとき拒まなければよかったと願う自分の心も、もう止められなかった。

「いいよ。エリックさんに触られるの、いやじゃないもの」

「そうか」

大きな手のひらが頬を包んで優しく撫でる。そのあたたかさに思わず顔が緩んだ。指で顎を掬われて、整った顔が近づいてきた。

怜悯な印象を与える切れ長の瞳が細められているのがよく見えた。エリックさんってこんなにやさしい顔するんだと見とれているうちに、柔らかいものが唇に押しつけられる。

「んっ」

広い背中に腕を回せば、湿った舌先がわたしの唇を舐める。おずおずと開けばゆっくりとぬるついたものが口腔に侵入してくる。

舌の表面をすり合わせながら、頭を撫でられれば言葉は少なくともわたしを慰めてくれているんだとわかった。

「エリックさんって、わたしのされたいことがわかつちゃうんだね」

夢なのだから当然なのかもしれないけれど、こちらの反応を窺いながらやさしくキスされて胸がドキドキと高鳴っていく。

「いいのか、このままだとオレはキミを抱いてしまうぞ」

どちらのともわからない唾液で濡れたエリックさんの唇を見つめながら、わたしは頬が熱くなるのを感じる。

「……いいよ、わたし。エリックさんのこと、好きだもの。できることなら、ちゃ

んと好きって伝えたかった。でも、もう遅すぎるよね」

わたしがそう呟くと、エリックさんが微笑む。

「遅すぎるものか、オレもコトネを愛している。お前が望むなら、いますぐ攫ってやりたいくらいだ」

今一番、わたしが望んでいる言葉だった。思わずベッドに座り込めば、エリックさんが覆いかぶさってくる。

二人きりで過ごした夜を思い出して、思わず広い胸に顔を埋める。きっとあの日、自分の身を顧みずにわたしを逃がしてくれようとしたときから、本当はわたしの気持ちは揺らいでいたのかもしれない。

ふわりとエリックさんのおいがする。いつも持ち歩いていた魔導書のインクと、薬草と、エリックさん自身の体臭が混じったにおい。安心して、思わず顔を擦り付けてしまう。

「……うん、エリックさん。わたしを攫って」

胸に埋めていた顔を上げれば、エリックさんの瞳とちち合う。ブラウスの裾から大きな手が入ってきた。大学から家へ帰って、着替える気力もわかずにそのまま眠ったときの服のままだった。

「あ♡」

「そんなことをいわれたら、自制心が緩んでしまうな」

骨ばった指が、おっぱいに覆いかぶさる。やさしく指を食い込まされれば、指先に鼓動が伝わるんじゃないかと思うくらいに心臓がどきどきしはじめた。

「あたたかくてやわらかいな。恥ずかしそうなキミの顔もとてもかわいい」

「——っ、な、なんでこんなときにだけ、饒舌っ、なのっ」

「愛おしい女をほめそやすことは当然のことだろう」

指の感覚を意識しすぎて、感覚が敏感になる。ブラ越しに乳房をやわやわと揉まれているだけなのに。声が裏返って、途切れ途切れになってしまう。

「……これはあちらの下着か？邪魔だな。ああ、ここで留めているのか」

一瞬で構造を理解したらしいエリックさんが、ブラの金具を外す。浮いた下着の間に手を差し入れられて、肌と手が密着した。

「あ♡」

エリックさんにおっぱい触られているだけなのに、カラダが熱くなって汗ばんでいく。もっと触られたくなってしまふ。元カレともこういうことをしたことがないわけじゃないけれど、こんな風に触ってほしくてたまらなくなった記憶はない。むしろ、いつも唇を噛みしめて、痛みに耐えていたような気がする。

「コトネ、なにを考えている」

「ん♡」

エリックさんの指の腹が、胸の頂を掠める。たったそれだけなのに甘い痺れがじんわりと広がって、甘い声が出てしまう。

「なにか別のことを考えてはいなかったか。オレにちゃんと集中しろ」

「んあ♡」

きゅ♡きゅ♡とやさしく両方の乳首を指でつままれて、びくっ♡と肩が震えた。素直すぎる反応に自分でも驚いていると、エリックさんは満足そうに指で乳首をこね回しはじめる♡触られて嬉しそうに固くしこっていく乳首が恥ずかしいのに、糸をこよるようにやさしくひねられたら、もっと大きくなってしまふ♡

「あう♡そこ♡あんど♡」

「ふふ、もう上の空ではないようだな」

「わ、わたしっ、最初からエリックさんのことしか考えてないのにいつ♡ひゃうっ♡」

固くなった乳首の根元から先端まで、抜かれるように愛撫されて腰が震える♡乳首をやさしくひねられるのも好きだったけれど、乳首を何度も抜かれると、そのたびにぞわぞわとした快感が背中を駆け抜けて行って、たまらない♡

「きもちいいか？ちゃんと教えてくれ。そのかわいい口で」

カチカチに勃起してしまった胸の尖りの先端を指先が円を描くように撫でる♡シコシコ♡ってされて固くグミの実みたいに赤くしこって敏感にされた先っぽ♡なでなでされると♡ショーツのなかにどばっ♡と愛液が滴ったのがわかる♡

「あ♡ん♡ん♡」

「キミが慎み深いのはわかってるが、ようやく想いが通じたんだ。きみのかわいい口で、ちゃんと悦くなれていると教えてくれ」

エリックさんの切れ長の瞳に獰猛な光が宿っているのに気づいて、ぶわっと全身が熱くなってしまう♡カラダが疼いている自分に戸惑いながら、わたしはおずおず



と口を開いた。

「んん♡あ♡エリックさんにつ♡おっぱいさわられてっ♡きもちいい♡」

「ふふ、かわいいな♡コトネのかわいい胸、見せてもらおうか」

ボタンを開けられたブラウスの前を開かれて、ブラをずらされて、汗ばんだ双丘を見られてしまう♡ツン♡と尖った乳首を見られているのが恥ずかしいのに、もっと見てほしいような自分でもわけのわからない相反する気持ちが出てくる。

「あ♡♡」

「ああ、綺麗なカラダだ。ずっとオレが見るわけにはいかないと律してきたが、ほんとうに美しいな。たわわに実って、ずっしりと重くて手に馴染む」

エリックさんは、わたしが旅の途中で止むを得ず川や湖で水浴びするときも見張りを買ってでてくれていた。けれども、裸を覗かれたり、その危険を感じたことは一度もない。

想いが通じるまで、ちゃんと待っててくれたんだとわかると胸に狂おしい愛おしさが湧いてきてどうにかなってしまいそうだった。

「……エリックさん、いいよ。全部さわって、ぜんぶ見て♡」

これが夢なのも忘れて、わたしは自分からブラウスとブラを脱ぎ捨てた。エリックさんの喉が大きく上下して、整った顔が胸に埋まった。

「まったく、こうやってオレを煽ってキミはどうするつもりなんだ？」

「あっ♡」

胸の膨らみをたどるように舌を這わされたあと、あたたかい舌が突起に絡まっていく。

「んん♡」

「ああ、カチカチだな♡オレに触られてこうなったのか♡うれしい♡」

胸に熱い湿った息をかけられながらしゃべられて、きゅん♡とお腹の奥が疼く。

固くなった先端をつぶすように舌でぐりぐり♡と押し込まれてひくん♡とおマンコが震えてしまう♡

「ひゃう♡」

「ん♡はは♡オレの舌を押し返してくるな♡オレの舌にコトネの乳首の感触が伝わってくる……♡」

普段のエリックさんからは想像できないような心なしか弾んだ声で、乳頭の窪みをぐりぐり♡とほじるように舐められる♡もう片方の乳首も指でよしよし♡って可愛がられて、ぞくぞく♡とカラダが震えていく♡

「ふぉ♡エリックさん♡きもいい♡おっぱいかわいがられるの♡♡すき♡」

一度素直になってタガが外れてしまったのかエリックさんの頭を抱え込むように抱きしめてしまう♡乳首の先っぽをほじっていた舌が一瞬止まって、ぢゅう♡と強く吸い付かれた♡

「あ?!♡」

口腔を狭ませて乳首をぎゅう♡と圧迫される♡びくっ♡と腰が浮き上がって、頭がふわふわする♡

「はっ♡ああ♡エリックしゃん♡」

「……乳首だけでいったのか?コトネは敏感なんだな」

やさしく微笑まれながら舌が左右に往復し、いったばかりの敏感な乳首をやらかい舌にひっかけるように舐めていく。

「や♡それっ♡きもちいっ♡」

腰をびくびく♡と軽く突き上げながら喘げば、舌が往復する速度が速くなる♡べろべろ♡べろべろ♡カチカチだったはずの乳首が唾液を吸わされてしっとり湿っていく♡

「あ♡やっ♡あ♡エリックさん♡そんなに乳首舐められたらふやけちゃう♡」

呼吸を整えながらエリックさんの肩を甘えるように押し返せば、あっさりと乳首が開放されてしまう。解放されてほっとしたのもつかの間、エリックさんはまだ湿っていないもう片方のおっぱいの方へ顔を寄せ始めた。

「そうだ、こちらを可愛がってやれていなかったな。すまない」

尖った先端にちゅっ♡と口づけてから根元をチロチロと舐められる♡それだけに根元から先端までたっぷり唾液をまぶされて♡乳頭を舌で押しつぶされたことを考えてしまう♡

「ん♡エリックさん、じらしちゃだっ♡」

「ああ、たくさんかわいがってやる♡コトネ、少し胸を寄せてくれるか？」

「——っ♡うん♡」

自分でおっぱいを差し出すように膨らみを持ち上げて寄せる。そうすると、ツン♡と尖った乳首がよくわかってしまう♡エリックさんにはやく舐められたくて、ヒ

クヒク♡とおマンコが震えてた♡

「ああ、これでかわいがりやすくなったな♡」

エリックさんの肉厚な舌が双丘を大きく舐めまわしていく♡おっぱいで唾液がテラテラと光って、まるでマーキングされているみたい♡気のせいかな、唾液をまぶされた場所がジンジン♡と熱い♡

唾液にぬれていなかった乳首も、エリックさんに舐められて濡れていく♡少しずラついた舌先で乳首を研磨されるように何度も往復されるようにぞりぞり♡と舐められるとまたあつという間に熱が高まってしまう♡

「あう♡ちくびっ♡きもちい♡またちくびだけでイっちゃう♡」

おっぱいを差し出すように突き出せば、エリックさんが喉奥でわらった気配がした。早く熱を解放したいとジンジンする乳首をエリックさんが口腔にすっぽりと収めてぢゅう♡♡と力強く吸い上げられる♡

「ぶあっ♡あっ♡あ~~~~っ♡」

全身を震わせながら喉を晒せば、きゅうう♡とお腹の奥が疼いていく♡ガクガク♡とカラダが痙攣するのがおさまってから、エリックさんはもう一度乳首をべろりと舐め上げた。

「~~~~っ♡はっ♡は~~~~っ♡」

大きく胸を上下しながら息を整えているのに、カラダの熱はおさまらない。自分でも、おマンコがぬかるんでいるのがわかつちやう♡

思わずもじもじと太ももを擦り合わせていると、エリックさんがわたしの足を開いた。

「あ♡」

「切なそうだな。触ってやろう」

スカートから手を差し入れられて太ももを撫でられると、ひくん♡とおマンコが

震えてしまう♡恥丘をゆっくりと撫でられると、肉土手が少し膨らんでいるのに気が付いてしまう♡

「ふ♡もう欲情しているのか♡オレに抱かれたがつているキミは、健気でかわいい♡」

ショーツ越しにふに♡と膨らんでいるマン肉を確かめるように指を沈められて、愛液がとろり♡と滴ってしまう♡

「物欲しそうな顔をして、そんなに早く抱かれないのか？」

エリックさんが微笑みながらあまく低い声で囁き、スカートをずり降ろされる。ショーツにいやらしいシミが出来ているのをまじまじと見られて、思わず足を閉じようとした。けれども、エリックさんがそれを許してくれなかった。

「っ、エリックさん」

「オレにコトネのすべてを見せてくれるのだろうか？キミが欲情したところをちゃ



んを見せてくれ」

ショーツのポリエステルのテラテラした生地がそこだけ濃い色になってしまつて、はずかしい。ふにふに♡と指を沈められて、ぬち♡とした粘着質な音が響く。ゆつくりと秘裂を何度もなぞられて、指に肉芽を掠められる。コスコス♡と強い刺激がぎやくにもどかしい♡

「あ♡ん♡ん♡」

クロッチ部分に染み出した愛液がエリックさんの指に絡んで、ねば♡と糸を引く♡クリトリス、さわつてほしくてたまらないのがバレちゃうと思うけれど止められない♡

「コトネはここが弱いのか？」

ショーツの生地を少し押し上げている肉豆をエリックさんの指が撫でて、内腿がふる♡と震えた。ショーツ越しにゆつくりカリカリ♡とやさしくひつかかれてじわ

♡と愛液がショーツに染み出てしまう♡

「ふふ、シミがひろがってしまったな♡ほら、もっと気持ちよくなれ」

エリックさんの慈愛と欲情が交じり合った瞳が近づいてきて、ふに♡と唇が合わさる。お互いの舌を擦り合わせるいやらしいキスをされながら、敏感な肉豆をずーっとカリカリ♡される♡

クリトリスからビリビリ♡と甘い電流が全身に広がる♡正直なカラダがすぐに腰を前後にゆらめかせはじめる♡

へこへこ♡とおねだりするように腰が動けば、ぐに♡とクリトリスにエリックさんの指が食い込んだ。

「ぐん♡」

欲情していることを隠せないわたしに、エリックさんがショーツをずり下ろす。むわっとしたメスの匂いが広がって、自分がどうしようもなく欲情していることを

思い知らされてしまう♡

お互いの唾液を交換するようなやらしいキスをしている間にも、エリックさんはわたしの秘裂をかわいがってくれる♡ぴよこりと頭を出したクリトリスの大きさを確かめるように指でゆっくりなぞられてから、執拗に指の腹でよしよし♡と撫でられた♡

「っっ♡ん♡ん♡」

舌を擦り合わせるとくちゅくちゅ♡という淫猥な水音が頭のナカに響いてくる♡それだけでも興奮するのに、いっしょに弱い肉豆を弄られて、きもちいいのに声を上げられない状況にぞくぞく♡と背中が粟立った。

「ん♡ん♡♡ん♡ん♡っ♡」

滴った愛液でクリトリスをぬるぬるにされて、裏筋をゆっくり擦り上げられる♡だんだん肉豆がおっきく育っていくのわかる♡だめなのに♡また腰がへこつい

ちやう♡

キスしながら情けなく腰を振っていると、エリックさんがぐりゅん♡と亀頭を押しつぶした♡